

〈原 著〉

武士道思想における死生観に関する一考察

—『五輪書』『兵法家伝書』を中心に—

高瀬 武志*

A consideration about the view of life and death in Bushido thought

—Focusing on 『五輪書』『兵法家伝書』—

Takeshi TAKASE*

Abstract

When considering Bushido thought, it succeeds in many researches which have focused on antique changes. These antique changes can be called antique peculiarity in Bushido thought. Furthermore, in research of Bushido thought, when pursuing originality, it is thought that research from a viewpoint of local peculiarity and position peculiarity are also required. This research tends to clarify changes of the viewpoints, antique peculiarity, local peculiarity, and position peculiarity. A main subject is consideration focused on the position peculiarity in it, and pays attention to the thought of the samurai as a 兵法者 person in early stages of modern times primarily. Especially, MUSASHI Miyamoto's "五輪書" and MUNENORI Yagyū's "兵法家伝書" are commented on as being the two modern major commentaries, and the samurai at the time of formation of a notice is a book which has had big influence on many people also in the grant from the first. The idea of a "道" is common in both. It can be said that the feature of the samurai as a 兵法者 person is here. Death for the samurai as a 兵法者 person is the result of losing, and is not honorable. A difference is found in the view of life and death of the samurai in a medieval-times, and the view of life and death of the samurai as a 兵法者 person, and it is observed here that it is one of the big reforming points on changes of the view of life and death in Bushido thought.

Key words: Bushido, View of life and death, Position peculiarity

1. はじめに

平成24年度より、中学校保健体育科の授業において武道が必修化された。文部科学省が定める「新学習指導要領」には、武道を指導するうえでの内容として「武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるよ

うにする」とある。

まず、「伝統的な考え方」とは多くの意味を含む表現ではあるものの、主だったものとして武士道の思想が挙げられる。

武士道をテーマとした著作・文献は数多くあるが、最も有名なものに新渡戸稲造氏の『武士道』¹⁾が挙げられる。しかし、新渡戸氏が指摘した武士道精神なるものは自身が幼少時より受けた道徳教育に根ざしたものであり、新渡戸氏の論が歴史的にも文献的にも実際の武士の実態に根ざしたのではなく、新渡戸氏の論を明治武士道或は新渡戸武士道と

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sports Science, Juntendo
University

いった形で区別することは武士道を専門に研究する人たちの中では常識化している²⁾。そこで、武道必修化に伴い、一般的に認知された「明治武士道」論に必要以上に傾斜するのではなく、むしろ、歴史的或は文献的に武士本来の実態に根ざした武士道の理解と普及は非常に重要な課題であると同時に、本来求められるべき姿であると考えられる。

次に、武道における「特性や成り立ち」として挙げられることが「武道」の前身は「武芸」であり、そのさらに前身は「武術」であるということ、そして、その最大の目的は自己を護り、敵を殺傷する技術の習得と実践であったという歴史的事実である。つまり「武術」を身につけるということはみずから「生」と「死」の間に身をおくということであり、その言動からは、おのずと「死生観」が滲みでてくるものと考えられる。

また、武道学研究において武士道に関連する研究は数多くされているが、概観すると、歴史の変遷の解明を中心課題とした研究が大半を占めているのが現状である。そこで武士道の歴史の変遷の解明だけに留まるのではなく、先述したように武士本来の実態から滲み出る思想、特に死生観に焦点をあてることは意義深いことである。

さらに突き詰めれば、本研究は武士道のより正確な理解と武道必修化に求められる内容の充実を計る一助となると考えられる。

しかし、武士道の思想を一度に全て網羅し、詳細に検討することは至極困難である。そこで、本研究では対象とする時代を「武術」が「武芸」へと変化する変革期である戦国時代末期から近世初期にかけてとし、数多いる兵法者の中でも、特に現代の武道に大きな影響を与えたとされる宮本武蔵と柳生宗矩に焦点をあて、各々が書き著した伝書を文献史料として用い、これらの史料から読み取れる「死」に関する記述を中心に比較し、時代背景や武士の置かれる社会的立場等も踏まえて中世期の武士の思想と兵法者という立場の武士の思想を比較し、死生観の変遷を考察していく。

2. 研究方法ならびに構成

本研究は、近世二大伝書と評される宮本武蔵著『五輪書』と柳生宗矩著『兵法家伝書』を主な文献史料とし、各史料に記述された内容を比較するだけではなく、その行間を読み取ろうとする、いわゆる文献学的手法を用いる。

論を起すにあたり、まず戦国時代末期という中世期の武士の思想や死生観を把握する必要がある。この時期の武士の思想や死生観が本研究における土台となり、ここから比較・検討が可能になると考える。よって、本研究における構成として武道がまだ「武術」としての色が濃い中世期の武士の思想や死生観の概観を把握したのちに、「武芸」へと変化しようとする変革期における近世初期の武士の思想や死生観を宮本武蔵と柳生宗矩という二人の武士の立場から考察を行う。

本研究における手順は以下の通りである。

- ①：中世期の武士の思想や死生観の特徴を述べる。
- ②：宮本武蔵の思想や死生観の把握を踏まえて①との比較・検討をし、異同を明確にする。
- ③：柳生宗矩の思想や死生観の把握を踏まえて①との比較・検討をし、異同を明確にする。
- ④：②と③を比較・検討をし、異同を明確にする。

先述したとおり、従来の武士道研究においては、歴史の変遷に着目した研究が大半である。この着目点から導き出せる結果を「時代的特殊性」(本研究においては①と②③との比較)とすることができ。また、筆者は対象とする武士が生活の拠点とした地域間における比較から「地域的特殊性」(本研究においては②と③の比較)を検討し、さらに武士社会が封建制という身分制度を採用していたことによる武士の立場による比較から「立場的特殊性」(本研究においては①と②と③の比較)を検討する。

本研究は「時代的特殊性」以外の新たな二つの特殊性に着目して研究を行う。ここに本研究におけるオリジナリティーがある。

3. 中世期の武士の思想と死生観の特徴

日本史における中世期とは、平安時代から戦国時代までを指すのが一般的である。本研究では、まず中世期の武士の思想や死生観の特徴を把握しておきたい。

武士の出自については、多様な説があり、一概に限定することは困難であるが、専門とする研究者の中では高橋氏の説く「軍事貴族」としての武士にその出自を見出す研究³⁾が最も有力である。中世期の武士の思想を概観すると、いくつかの思想的変遷が窺える。

まず、平清盛を頂点とする平氏を中心とした武士の思想が挙げられる。この思想は平氏が貴族化を強く推し進めたことも影響し、雅や美といった風流に重きをおく貴族文化の色が濃く、死生観としては「雅」や「静」といった観念が特徴として挙げられる。それは、源平の合戦において、平氏の命運が尽きたと感じた平知盛は、平氏の所持していた武具等といった見苦しいものは全て海に投げ入れ、最後は平氏の没落を静かに見届けてから自身も死を受け入れて入水する。ここに「もののあわれ」といった情感を求めることができると同時に貴族化した武士は「死」までも風雅に、そして華麗で美しくあろうとする姿勢や「死」を静かに受け入れようとするところからも理解できる。

つぎに、源頼朝を頂点とする東国武士が貴族化した平氏を打倒し、源氏が新たな武士政権と思想を築く。思想的性格は、情誼的主従関係を中心とする中で、武士個人の実力がものをいう荒々しい性格が窺えるものとなる。死生観としては「勇猛」という観念が特徴として挙げられる。これは『平家物語』に登場する東国武士の木曾義仲と今井兼平という二人の武士の主従関係を例として挙げる。木曾義仲は征夷大将軍に任命される程の武将である。一方の今井兼平は木曾義仲に仕える武士であり、主君を逃がす為には戦場に一人残り勇猛果敢に孤軍奮闘し、主君が逃げきれずに死んだことを知った時は主君の死後の供をするために、潔く自害し果てる。これは主君と

の情誼的連関をもってのみ果たしうる行為であり、また、主君の名誉と自身の名誉をかけて勇猛に戦おうとする姿勢が読み取れる。これが東国武士の死生観の特徴である。

また、源氏の衰退の後に北条氏が台頭するが思想や死生観としては新たなものを築くまでには至っていない。

そして、北条氏を打倒し武士政権を築いたのが足利尊氏を中心とする坂東武士である。思想的性格としては基本的には変化はみられない。しかし、死生観の特徴としては、死を勇猛に「飾る」という傾向が強かった死の捉え方に新しい観念がみられるようになる。それは、自身の死後における一族の安泰や名誉の確立と伝承という観念である。

これは、「ご恩」と「奉公」といった鎌倉幕府が構築した武士社会の關係に代表されるような一族としての武士团组织内の結びつきから、個人の名誉や先祖の名誉だけでなく、一族の未来の為にどのような「死」を遂げるか或は「死」を飾るかといった、これまでにはみられなかった「死」への観念がみとれる。これは以下に記す『太平記』にみられる記述からも理解できる。

輕し死重し名者ヲコソ人トハ申セ。誰々モ爰ニテ討死シテ、名ヲ子孫ニ残サント被_レ思定_レ候_ヘ⁴⁾。

以上の記述からも理解できるように、鎌倉幕府以来続く「御恩」と「奉公」の主従関係から室町期前半においては譜代という数代にわたっての主従関係が生まれ、そこには個人同士の結びつき以上に一族同士の結びつきが強くなる。すると、自身が勇猛に戦い、その結果として討死しても主君への忠誠の証と武士としての名誉は自分の子へと継承される。また、残された一族も優遇されるという風習が定着する。よって、武士は自身の死後、残される一族のためにも勇敢に戦おうとする。ここに、これまでに見られなかった一族としての意識が高まってくることとなる。

中世期の武士の思想と死生観の特徴を概観すると

以上のような変遷を経ていることがあげられる。

4. 宮本武蔵の思想と死生観—『五輪書』を中心に—

宮本武蔵(1584頃～1645)は江戸時代初期に主に活躍した兵法者であり、二天一流の開祖でもある。また、その思想は現代剣道のみならず現代に生きる一般の人々にも多大な影響を及ぼしている。特に『五輪書』は宮本武蔵の思想を最も体系化させたものであり、近世二大伝書の一つとして高い評価をされ、今や世界中で翻訳され読まれている。

『五輪書』は、正保二年に宮本武蔵の著と伝えられているが宮本武蔵の自筆本が現存しないことから、その成立には諸説ある。しかし『五輪書』は二天一流の基本的伝書であり宮本武蔵の思想を最もよく表している史料であることは事実である。宮本武蔵の著作と伝えられているものには『兵道鏡』や『兵法三十五カ条』や『独行道』など多数あるが、宮本武蔵の思想や兵法観を断片的にではなく体系的に読みとるうえでは『五輪書』が最も適していると考えられる。湯浅氏も「『五輪書』には武蔵が五十余年の孤独な修行から得た兵法観・人生観が生身のまま提示されているという良さがある⁹⁾」と指摘していることから『五輪書』を中心に据えて考察をこころみる。

『五輪書』は「地」「水」「火」「風」「空」の五巻から成っており、「地」の巻では心構えを説き「水」の巻では個人的技法を説き「火」の巻では対人的技法への発展を説き「風」の巻では多様性への対応を説き「空」の巻では高度な心法を説くといった構成で展開されている。また、宮本武蔵は従来の武士道とは明確に異なる思想である「兵法の道」という思想を示している。

これは、宮本武蔵研究の第一人者である魚住氏も著書の中で「『五輪書』は、以上の五巻により、剣術の理を核として武士のあり方全体にわたる『兵法の道』を示そうとしたものである⁶⁾」と指摘している。

『五輪書』にみられる宮本武蔵の死生観が顕著に

読み取れる記述を以下に記す。

「大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也⁷⁾」

「死する道におゐては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百姓已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、其差別なきもの也⁸⁾」

以上の記述からも理解できるように、宮本武蔵は死を思いきって遂げることを武士特有のものとは考えず、むしろ女性や農民や僧侶にも同様にみられるものであると指摘し、泰平の世における為政者としての立場になった武士の「死」への関心の低さ、つまり中世期の武士にみられた「死」に込める思いや感情などが希薄になり、覚悟ではなく覚えるという安易なものにとって変わっていることにたいして警鐘をならしている。そして、思い切って死ぬことが武士の専売特許とでもいわんばかりの為政者的武士の死に捉え方を女性や僧侶や農民という士農工商の身分制度の中で武士より格下の身分の者と比較しながら、その死の捉え方では大差ないことを指摘し、武士の死の捉え方の勘違いと高い身分にみられる思い上がりとして戒めている。

さらに、『五輪書』にみられる「兵法の道」の思想に関連してみられる特徴として「我」と「道」の観念がみてとれる。その記述を以下に記す。

「武士の兵法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ⁹⁾」

以上の記述からも理解できるように、まず、勝負の場では勝つことが何にもまして優先される。それは主君の為であると同時に、自分の為であるとされる。また、魚住氏も指摘しているように、天下泰平により国同士の戦はなくなり、武士同士が争う場は

個人対個人という形式が主だった戦闘へと変化する。

この変化が武士に与える影響として、意識の方向性の変化があげられる。つまり、今までは万策を講じてでも相手に勝つことが武士における最大目的であったことから意識の方向は敵である相手に向けられる。しかし、戦い方が変化したことによって、相手と一対一で対峙したときの緊張感や駆引きの質は格段と高くなる。そうした場合、勝負の場に立つ前の心の準備や整理が必要不可欠となる。よっておのずと、意識の向かう方向としては自分自身へと集中する。ここに「我」という観念がみられる。

このように、宮本武蔵は、兵法修行の旅の中で、常に自分自身と向き合いつつ真剣勝負を繰り返す。そうした中で、精神的鍛練を重ねていくうちにその精神の充実過程と技術の向上過程が「道」としての観念に成熟し、さらにその「道」を極めていくと得られる融通無碍の境地として「空」に至ると述べている。それは『五輪書』の以下の記述からも理解できる。

「独り太刀をとつても、其敵々の智略をはかり、敵の強弱、手だてをしり、兵法の智徳を以て、万人に勝つ所を極め、此道の達者と成り、我兵法の直道、世界におゐて誰か得ん、又いづれかきわめんと慥に思ひとつて、朝鍛夕錬して、みがきおほせて後、独り自由を得、おのづからきどくを得、通力不思議有る所、是兵として法をおこなふ息也¹⁰⁾」

「武士は兵法の道を慥に覚へ、其外武芸を能くつとめ、武士のおこなふ道、少しもくかららず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心のみがき、観見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空としるべき也¹¹⁾」

以上の記述から、『五輪書』にみられる「兵法の道」の思想を表す中心的な観念として「我」「道」「空」といった観念がよみとれる。さらに、死生観

としては思いきって死を遂げることは武士だけの特権ではないと戒め、「死」を前提として受け止めたうえで、武士である以上、自身の精神を整え、敵である相手にいかにして勝つか(生きるか)を必死に模索するという考え方がみてとれる。またそれを求道者的(ストイック)に追い求めていく。さらに、中世期までみられた「武士の死」と他者との連関がどのように変化したかについて述べる。天下泰平にともない、国同士といった大きな戦はもちろんのこと、後にみられるようになる他流試合や私的な決闘・仇討の禁止といったように、世は至って平和な情勢を作りだそうという動きをみせる中で、中世期のように自身の戦での活躍によって一族の安泰や繁栄をはかることは期待できないものとなる。また、武士の本来の活躍の場である合戦がなくなり、武士の中においても身分制度が徳川家を中心に確立されていくなかで、自分以外の者のための死という観念が希薄になる。よって「武士の死」と他者との連関は希薄になり、「我」という自身への意識が高まっていったと考えられる。

ここに中世期の武士の思想や死生観にみられない、宮本武蔵の思想と死生観が明確な違いとしてみてとれる。

5. 柳生宗矩の思想と死生観—『兵法家伝書』を中心に—

柳生但馬守宗矩(1571~1646)は、柳生宗厳の五男として生を受け、関ヶ原の合戦や大阪夏の陣等の活躍が徳川家康に認められ、徳川秀忠(二代将軍)と徳川家光(三代将軍)の兵法指南役に任じられる。後に一万石の大名になるなど、兵法者としては最も出世をした武士である。柳生但馬守宗矩著『兵法家伝書』は新陰柳生流の基本的伝書であり、寛永九年に著され「進履橋」「殺人刀」「活人剣」の三部から構成されている。「進履橋」は「新陰流兵法之書」ともいわれ、上泉伊勢守信綱から柳生宗厳へと相伝された新陰流の技法をまとめ上げたものであり、目録と伝書の間隔的な書物である。

「殺人刀」と「活人剣」は、柳生宗厳・宗矩の二

代にわたって工夫・考案された新陰柳生流の技法ならびに心法論を理論的に詳述したものであり、非常に体裁の整えられた伝書である。

『兵法家伝書』は将軍家兵法指南役として非常に理論的体系的に新陰柳生流の剣術の極意を論じた伝書とされ、現在は四つの系統¹²⁾で伝えられており、幅広い地域に伝わっていることがわかる。このことから成立時の武士に与えたであろう影響は絶大であり、現代においてもその影響力は変わらず、『五輪書』と並んで近世二大伝書と評されている。

ここで、柳生但馬守宗矩(以下、宗矩)が『兵法家伝書』を著すうえで影響を受けたとされる禅僧・沢庵と能の大家・金春家との交流についてふれる。

まず、禅僧・沢庵との交流関係は三代将軍・徳川家光(以下、家光)を介する三者での交流があったと伝えられている。沢庵は臨済宗の禅僧であるにも拘らず、家光の御前で宗矩と兵法談義をし、その時の内容を剣術における極意として著した『不動智神妙録』を兵法指南役の宗矩に贈与している。また、宗矩は沢庵のことを「法(のり)の師」と評価するほどに、二人の関係性には深い関わりがみられる。

つぎに、能の大家・金春家との交流関係についてふれるまえに能と武士との関係性についてふれる。能は、日本が世界に誇る伝統文化であるが、室町初期に大成して以来、六百年以上にわたる歴史の大部分を武士社会に寄り添うかたちでその保護下にあり、武士によって育てられた芸術でもあるといえる。能の一要素である謡を嗜むことは近世の武士にとっては必要不可欠な教養であり、武士はそれを自分たちも実際に舞い、楽しんでもいた。このように能と武士との関係はとても深い。柳生家と金春家との関係性をみたとき、特筆すべき人物として能役者であると同時に新陰柳生流を学ぶ武芸者であった金春七郎氏勝(以下、氏勝)があげられる。氏勝は金春座の七代目大夫という一流の能役者であり、新陰柳生流の奥義を極めた一流の武芸者でもあった。また、地理的条件として金春家の領地である中ノ川村や坊城村は奈良坂から柳生へと続く月ヶ瀬街道に沿った地であり非常に隣接した土地柄である。このよ

うな地理的条件も両家の交流に影響があったことが理解できる。

『兵法家伝書』にみられる「兵法の道」の思想のキーワードとして「正義」や「道」という観念が読みとれる。まず「正義」の観念が読み取れる記述を以下に記す。

「しかあれど、止むことを得ずして兵を用ゐて人をころすを、又天道也と云ふ。其心如何となれば、春の風に花さき緑そふといへ共、秋の霜来て、葉おち木しぼむ。是れ天道の成敗也。物の十成する所を、打つことはりあらば也。人も運に乗じては、悪をなすといへども、其悪十成する時は、是をうつ。こゝをもつて、兵を用ゐるも天道也といへり¹³⁾」

「兵法は人をきるとばかりおもふは、ひがごと也。人をきるにはあらず、悪をころす也。一人の悪をころして、万人をいかすはかりごと也¹⁴⁾」

このような観念が強調されるに至った背景として先ず挙げられるのが天下泰平による治世という社会情勢と柳生家の置かれた立場が将軍家兵法指南役という当時の武士の中では至って高い身分にあったと同時に為政者として自身の言動に正当性が必要不可欠であるといった「立場」が強く影響していると考えられる。つぎに「道」の観念が読み取れる記述を以下に記す。

「今此三巻にしるすは、家を出でざる書也。しかあれど、道は秘するにあらず。秘するは、しらせむが為也。しらせざれば、書なきに同じ。子孫よく之を思へ¹⁵⁾」

「学は道にいたる門なり。此門をとをりて道にいたる也。しかあれば学は門也、家にあらず。門を見て家也とおもふ事なかれ。家は門をとをり過ぎて、おくにある物也。学は門なれば、文書をよみて是が道也とおもふ事なかれ。文書は道

にいたる門也¹⁶⁾」

以上に記した記述のうちの二つ目の記述は、一見、学問について述べているようにも受け取れるが、この学とは剣術を学ぶことであり、そこには学ぶ行為も含まれた表現であると解釈できる。また、剣術を学ぶこととは、即ち武士にとっては生き方を学ぶことでもあり、さらに生き方と死に方とは表裏一体である。したがって、新陰柳生流の剣術を学ぶ中で「道」の観念が見いだせるということは、武士道思想においても道の観念がみられるようになることであるといえる。

中世期の武士の思想と比較して、強く正当性にこだわる点と精神の成熟過程と技術の習熟過程を合わせて「道」として捉えている点に『兵法家伝書』にみられるそれまでの武士の思想とは異なる明確な違いがみとれる。死生観をみた場合『兵法家伝書』では「死」は中世以前の武士にみられた「名誉ある死」や「勇猛な死に様」といった死を「飾ろう」とする観念はみられず「死生一如」や「無」というような禅宗の色の濃い考え方が窺える。それは以下の記述から理解できる。

「人の死するは、有かくるゝ也。人の生るゝは、無あらはるゝなり。其躰常なる者也¹⁷⁾」

先述したように、中世期の武士は死を特別視し「飾ろう」とする。それは生と死は別物として捉えているからであると考えられる。しかし、先述した引用文からも理解できるように『兵法家伝書』では死は生として有ったものが隠れ、みえなくなることであり、生は無から現れ有なる状態となることであり、死と生が本質的には同じものであり、表現のされ方に相違はあるものの、その中核は「無」であるという考え方がなされている。ここに「死生一如」と「無」の観念がみられる。ここに中世期の武士の思想や死生観との明確な違いがある。

6. 宮本武蔵と柳生宗矩にみられる思想と死生観の比較

本節での狙いは、ともに「兵法の道」を極めた宮本武蔵と柳生宗矩という近世を代表する兵法者を比較することによって、自身の置かれる立場や地域によって思想や死生観に、どのような相違がみられるようになるのかを明らかにすることである。

両者に関する概要を表にまとめると以下のようになる。

表1からも理解できるように、両者はほぼ同時代を生き、どちらも一流派を形成し代表する兵法者であるという点は一致しており、注目すべきは「道」という観念を抱くようになったことが一致している点である。これは、戦乱が治まり泰平の世に生きる武士において合戦から一対一の戦いへと戦闘形態が移行するなかで、意識の向かう方向性が相手や環境といった外方向であったものから、自身の心の持ちようという精神的安定や戦闘における正当性といった倫理観を重視する内方向に働く意識の方向性が影響していると考えられる。これを宮本武蔵は「空」への過程を道と捉え、それを朝鍛夕錬と表現して方法論を説き、柳生宗矩は「無」への過程を道と捉え、それを禅や儒教といった宗教的背景を「学問」に例えながらその本質と方法論を説いた。ここに兵法者として技を極め、心を錬る求道者的武士の思想が確

表1 宮本武蔵と柳生宗矩の比較

人物	宮本武蔵	柳生宗矩
著書	五輪書	兵法家伝書
生没年	1584~1645	1591~1645
流派	二天一流	新陰柳生流
身分	熊本藩細川家 客分	大名(一万石) 将軍家兵法指南役
思想的キーワード	「我」「道」「空」	「正義」「道」「無」
死生観	生は武を極めるうえでの過程であり、死はその過程における一つの結果	死生一如・無

立されている。これを近世初期にみられる武士の思想の時代的特殊性と捉えることができる。

つぎに、両者における異なった見解がみられる点であるが、宮本武蔵は「我」と「空」という観念を導き出しているのに対し柳生宗矩は「正義」と「無」の観念を導き出している。ここには、両者を分ける決定的な身分の差が影響していると考えられる。宮本武蔵は一藩の客分でしかないのに対し柳生宗矩は一万石の大名であり将軍家の兵法指南役である。あまりにも二人を取り巻く環境がかけ離れている。そうした中で、宮本武蔵は兵法者個人に対する見解を述べ、柳生宗矩は兵法家全体に対する見解を述べている。宮本武蔵のように身分の決して高くない兵法者としての武士の場合、自身の目前にある勝負を通じた思想や死生観が中心となる。しかし、柳生宗矩のように身分が高く、兵法者であり政治家でもある武士の場合、目前の勝負だけではなく社会全体を視野に入れた中で、思想や死生観にも誰もが納得しうるだけの正当性や論理性が必須となる。ここに武士の立場による相違がみられ、これを立場的特殊性と捉えることができる。

死生観の相違点としては、宮本武蔵は中世期の武士の死と生の捉え方に近い。しかし無暗に死を「飾ろう」とはせず、あくまでも「勝つこと」にこだわり、武士として何事か成さんという気概で挑んだ一つの結果として死が位置づけられている。しかし、柳生宗矩の場合は「死生一如」として、死は有がくれ無となり、生は無からあらわれ有になる、つまり死と生は表裏一体であり、一つの如くあるものでありそれは「無」から発動するという非常に宗教色の濃い捉え方をしている。これは立場の違いということも少なからず関係はあるだろうが、むしろ柳生宗矩が将軍家兵法指南役として幕府の中核にあり、儒学者や禅僧や能役者といった多様な文化と思想を持つ人物が多く集まる江戸の中心に在るのに対し、宮本武蔵は九州・熊本という地方にいたという地域性による影響が強く感じられる。最先端の思想や習慣という文化は都市部で形成され地方へと伝播していくという基本的プロセスは過去においても現在に

においてもそう大差ないと思われる。現代のような情報のネットワークが発達していない近世初期において、多種多様な文化や人が集まる江戸のような中心都市では、文化や思想をより論理的体系的確立させようと至って発展的であるのに対し、地方のような情報量の乏しい環境においては新しいものを創出しようというよりも過去にあった理想への憧憬志向が強く、至って懐古的である点に特徴がある。ここに武士の生活する地域による相違がみられ、地域的特殊性と捉えることができる。

7. おわりに

これまで、中世期の武士の思想や死生観をベースとしながら、近世を代表する兵法者である宮本武蔵と柳生宗矩に焦点をあて、兵法者としての武士にみられる思想や死生観を時代的特殊性と立場的特殊性と地域的特殊性の三つの観点から考察を行った。

先述した三つの特殊性をふまえて、宮本武蔵や柳生宗矩といった兵法者の思想や死生観が武士道思想に与えた影響をあげると以下の通りである。

- ①精神的成熟過程と技術的習熟過程を「道」と捉え、変化した戦闘形態の中で意識の内省的方向に高度な理論付けをし、戦闘者の思考から修行者・求道者の思考へと武士の思考形態に変化をもたらした。
- ②それまで口伝という形態が流派の主だった伝承形態に、伝書という新しい伝承形態を構築し技術的発展のみならず精神的発展の正確性を高めることに大きく貢献をした。
- ③特に柳生宗矩においては、泰平の世における武の存在意義を論理的に明らかにし、剣術が為政者としての武士に必須な教養であると同時に奨励すべき正当性を明確にしたことによって、後世における為政者としての職分の自覚を理想とする武士道である土道論形成の根幹に関わる思想的影響を与えた。

以上の事柄が、宮本武蔵や柳生宗矩といった兵法者の思想や死生観が武士道思想に与えた影響であると考えられる。

今後の課題として、研究対象とする兵法者をさらに増やし、そこにみられる思想や死生観の相違を明らかにすることがあげられる。

また、本研究で取り扱った主な参考文献は以下の通りである。

主な参考文献

- 酒井利信：『日本精神史としての刀剣観』，第一書房，2005。
- 和辻哲郎：『和辻哲郎全集』，岩波書店，1962。
- 相良 亨：『相良亨著作集』，ペリかん社，1995。
- 加藤咄堂：『死生観 史的諸相と武士道の立場』，書肆心水，2006。
- 菅野覚明：『よみがえる武士道』，PHP 研究所，2003。
- 古川哲史監修，魚住孝至編集・解説，羽賀久人校注『諸家評定』，新人物往来社，2007。
- 高橋昌明：『武士の成立 武士像の創出』，東京大学出版会，2004。
- 田村芳朗・源 了圓：『日本における生と死の思想 日本人の精神史入門』，有斐閣，1977。
- 加藤周一：『日本人の死生観』（上・下），岩波書店，1977。
- 多田 顕：『武士道の倫理 山鹿素行の場合』，麗澤大学出版会，2006。
- 磯部忠正：『「無常」の構造 幽の世界』，講談社，1976。
- 古川哲史：『改編新版 日本の求道心』，理想社，1992。
- 中林信二：『武道のすすめ』，島津書房，1990。
- 中林信二：『武道論考』，中林信二先生遺作集刊行会，1988。
- 井上順孝：『宗教』，ナツメ社，2006。
- 前澤桃子：『日本の歴史』，ナツメ社，2009。
- 池上英子：『名誉と順応 サムライ精神の歴史社会学』，NTT 出版株式会社，2000。
- 網野善彦：『東と西の語る 日本の歴史』，講談社，2008。
- 河内祥輔：『保元の乱・平治の乱』，吉川弘文館，2007。
- 市沢 哲：『太平記を読む』，吉川弘文館，2008。
- 八代国治：『吾妻鏡の研究』，明世堂書店，1913。
- 大野 晋編：『本居宣長全集』第四巻，筑摩書房，1969。
- 安井久善：『太平記要覧』，おうふう，1997。

- 古川哲史校訂：『武道初心集』，岩波書店，1943。
- 小瀬甫庵著桑田忠親校訂：『太閤記』，岩波書店，1943。
- 龍 肅 訳：『吾妻鏡』，岩波書店，2008。
- 新渡戸稲造著矢内原忠雄訳：『武士道』，岩波書店，2007。
- 岩佐正校注：『神皇正統記』，岩波書店，2008。

- 1) 原題は“Bushido, the Soul of Japan”。
- 2) 武士道研究の第一人者であり，倫理学者でもある菅野氏も著書『武士道の逆襲』で同様に指摘している。
- 3) 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会，2004。
- 4) 『太平記』二巻，日本古典文学大系35，岩波書店，p. 143, 1961。
- 5) 湯浅晃『武道伝書を読む』財団法人 日本武道館，p. 72, 2001。
- 6) 魚住孝至『宮本武蔵―「兵法の道」を生きる―』岩波書店，p. 125, 2008。
- 7) 宮本武蔵著 渡辺一郎校注：『五輪書』岩波書店，p. 12, 1985。
- 8) 宮本武蔵著 渡辺一郎校注：『五輪書』岩波書店，p. 12, 1985。
- 9) 宮本武蔵著 渡辺一郎校注：『五輪書』岩波書店，p. 13, 1985。
- 10) 宮本武蔵著 渡辺一郎校注：『五輪書』岩波書店，p. 79, 1985。
- 11) 渡辺一郎校注：『五輪書』岩波書店，p. 138, 1985。
- 12) 江戸柳生家本・熊本細川家本・小城鍋島本・鹿島鍋島本の四系統である。
- 13) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注：『兵法家伝書』岩波書店，p. 20, 1983。
- 14) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注：『兵法家伝書』岩波書店，p. 26, 1983。
- 15) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注：『兵法家伝書』岩波書店，p. 26, 1983。
- 16) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注：『兵法家伝書』岩波書店，p. 27, 1983。
- 17) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注：『兵法家伝書』岩波書店，p. 67, 1983。

(平成24年3月12日 受付)
(平成24年5月8日 受理)